十勝小豆14年ぶり高値　品薄、需要減退に懸念

2018年10月16日

和菓子の原料となる十勝産小豆の価格が高騰している。十勝農産仲立業組合によると、10月は１俵（60キロ）当たり２万5000円と９月比で3500円上昇し、14年ぶりの高水準となった。十勝は国産小豆の約６割を生産するが、2016年に台風被害で不作となって以降、全国的な品不足を招いている。今年産も天候不順で豊作は見込みづらく、価格がつり上がった構図だ。和菓子メーカーの買い控えにつながらないか懸念する声がある。

小豆価格は収穫期を迎える９～10月に変動することが多い。十勝農産仲立業組合の価格は脱穀したままの「素俵（すびょう）」で、15日に10月の初値２万5000円が付いた。３万700円だった04年６月以来の高水準で、10月としては03年に並ぶ価格となった。

管内の農家はここ数年、小豆より価格が安定し、手間がかからない大豆の作付けを増やす傾向にあった。そこに16年の不作が重なり、小豆の品薄感が強まったためＪＡなどが小豆の作付け増を農家に要請。昨年は全道の作付面積が約１割増え、収量も回復した。

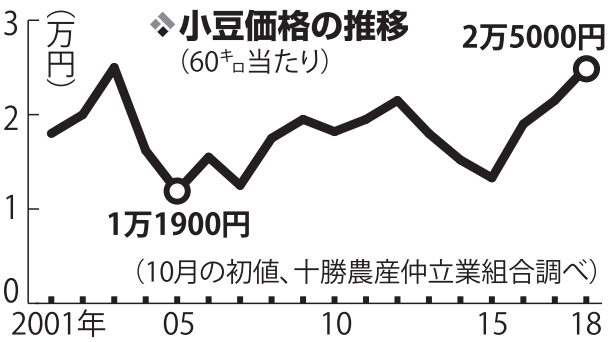
だが、今年は６月の低温多雨が影響し、小豆の生育の遅れが目立っている。音更町の農家三浦尚史さん（48）は「今年産を半分ほど収穫したが、青いさやがかなり交じっており、収量が心配だ」と話す。管内ＪＡ幹部も「地域差はあるが、今年の作柄は平年を下回りそうだ」と明かす。

今年産が期待通りの収量を見込めないのであれば、来年にかけて小豆の在庫はさらに減少し、品不足に拍車が掛かる恐れがある。

雑穀卸の丸勝（帯広）の梶原雅仁社長は「小豆価格は当面、今の水準を下回ることはなさそう」とした上で、農家には「来年の作付面積をさらに拡大してもらいたい」と訴える。

和菓子メーカーは対応に苦慮している。十勝産小豆をあんの原料とするとかち製菓（中札内）は今年、価格高騰を見越してあんを使う新商品の発売を見送った。来月から仕入れ価格が２割上昇するという。

駒野裕之社長は「価格上昇が続けば、小豆をすべて十勝産で賄うのは難しくなる」と指摘。「十勝産にこだわり続ける場合、商品の値上げや容量変更も検討せざるを得ない」とする。

農家も価格上昇を手放しでは喜べない。消費者の国産人気は根強いものの、和菓子などが値上がりすれば、国産小豆の需要が減退しかねない。豊頃町の農家山崎浩道さん（48）は「小豆の買い控えが広がらないか心配」と話している。

管内で収穫中の小豆。さやが青いままで生育の悪いものが少なくない